

## 6) シュウメイギク＝秋明菊

シュウメイギクはキンポウゲ科の多年草である。原産地は中国で日本各地の山野に自生する。地下茎を出して四方に繁殖し、高さは 60cm～1m に達する。葉はしばしば三小葉に分かれ、長い葉柄があり不揃いの鋸歯がある。秋に茎の上部に花径 5cm ほどの菊に似た美しい花を開く。和名の起りは花が菊に似ており、秋に咲くため、別称としてはキブネギクとも呼ばれている。これは京都府の貴船神社の境内に多く自生しているためである。関西方面ではシュウメイギクというよりも、キブネギクと言った方が通りがいいのはこのためである。またアキボタンなどと呼ぶ地方もあり、これは中国名の借用であって、明代に王圻(オウキ)により編纂された『三才図会』(サンサイズエ)には『秋牡丹』としての記述が見える。また江戸時代初期の貝原益軒も『大和本草』の中で秋牡丹として取り上げている。古くはこのように呼ばれていたものと思われる。しかしその約半世紀後、水野元勝によって著された『花壇綱目』には秋明菊として記述され、当事はどちらも普遍的に用いられていたものと思われる。この他にも別称は多く、カラギク、コウライギク、アキシヤクヤク、カガギク、エチゼンギクなどとも呼ばれている。学名は『*Anemone hupehensis*』で、属名は地中海産のアネモネのギリシャ名「風の娘」という意味であるとも、美少年アドニス of セム語名とも言われている。一説によればアドニス that 流した血によって、真紅の東洋種が咲いたとも伝えられている(01-03-03 アネモネの項参照)。種小辞は中国湖北省産のという意味である。中国名は前述のように『秋牡丹』で、イギリスではこの花を『Japanese anemone』と呼んでいる。

シュウメイギクの花はコスモスにも似ている。しかしこの花はアネモネの仲間、弱アルカリ土を好む。しかも花卉に見えるのは実は萼片で、このように萼片と花冠の一方を欠く花のことを専門的には『単花被花』(タンカヒカ)と言う。また『被花』とは外側にある萼片とその内側の花冠のことを意味している。これに対して萼片も花冠も両方とも備わった花を『両花被花』(リョウカヒカ)と呼んでいる。『両花被花』は2つに区分され、萼片と花冠の区別ができないユリのような花を、『同花被花』。逆に萼片と花冠の区別がはっきりしているものを『異花被花』(イカヒカ)と言う。さらにドクダミのように苞はあるものの、花被を持たない花を『無花被花』(ムカヒカ)とか、『裸花』(ラカ)と呼んでいる(03-05-01 ドクダミの項参照)。

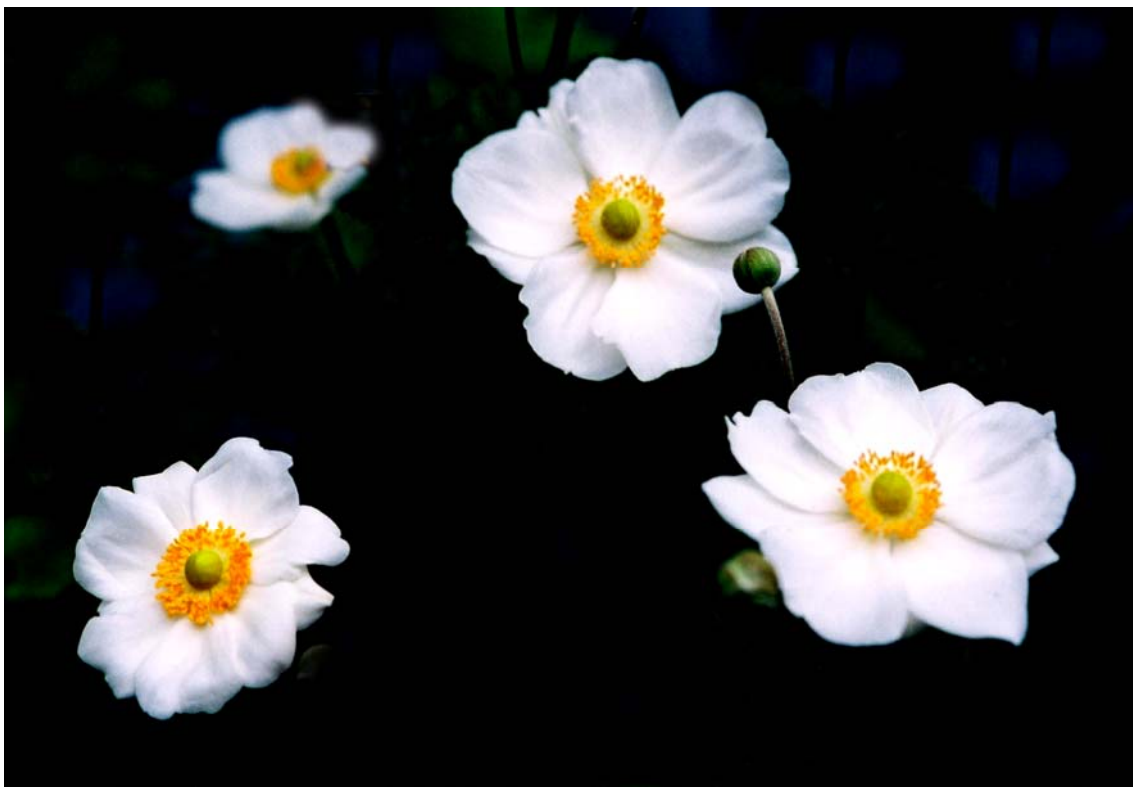
さてシュウメイギク栽培のポイントは、半日陰のやや湿り気のある所に植えることと、西陽の当たらない所に植えること、そして酸性土を避けることの3点である。また花の咲く頃になると背丈も高くなって、風で倒れやすいので支柱をしてあげることも重要である。よく見かける花は淡い藤紫の一重咲で、稀には濃紅紫色で八重咲のもの、最近では白花の品種がよく販売されている。長野の善光寺の宿坊には、ひときわ大きな白花株があり、花の季節は見事である。



紅花八重咲種のシュウメイギクは、この季節の美しい花の代表でもある。八重咲種は優雅な花であるが、一重咲種は、非対称形の野生的な花である(栽培品)。



紅花の八重咲種と同じような花形の白花八重咲種(栽培品)。



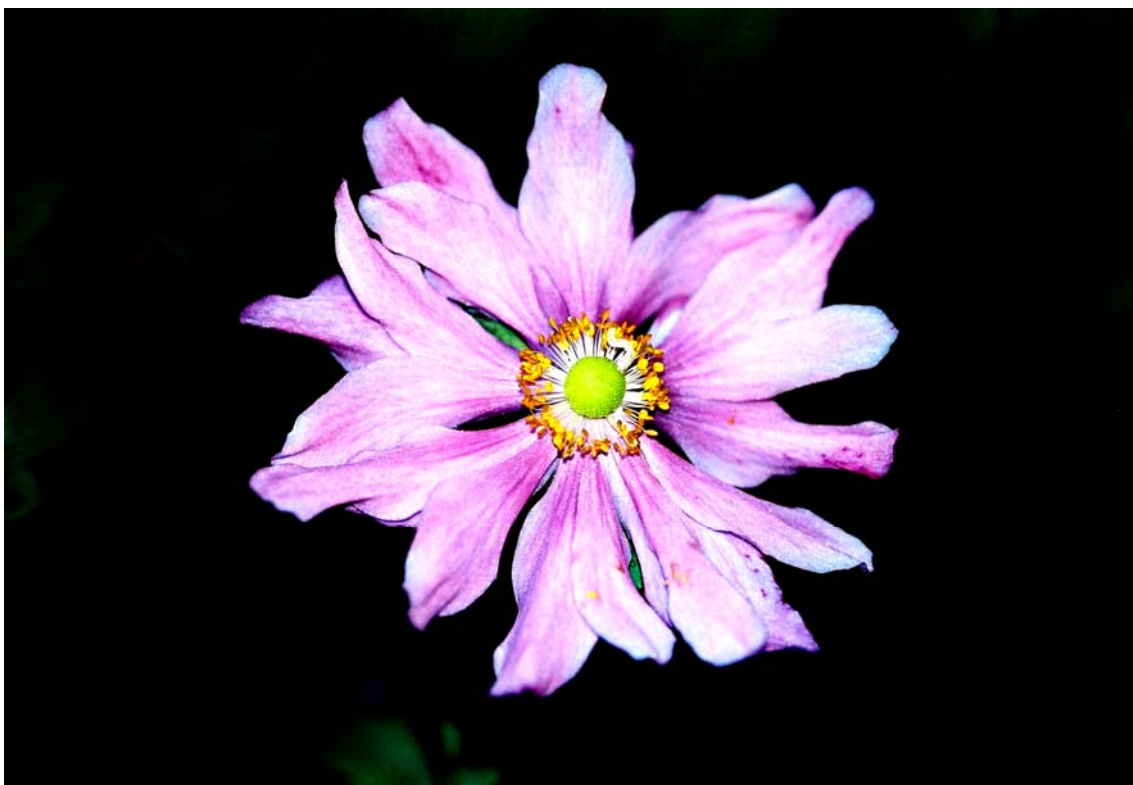
花卉数が少ない半八重咲種もある(栽培品)。根茎を出して横に広がって増えてゆくので、時には大株になって咲くこともある。善光寺の宿坊にはそんな大株がある。



一重咲のシュウメイギクは、花卉の形も大きさも不ぞろいになる。そこがご愛嬌かも(栽培品)。



一重咲で白花のシュウメイギク(さいたま市浦和区：栽培品)。陽当りを好むものの、西陽を嫌う傾向にあるので、西陽の避けられる場所に植えてあげたい。



こんな花形のシュウメイギクも…(埼玉県深谷市：栽培品)



高崎市倉渕町の東善寺の秋明菊。この寺の山中には小栗上野介(07-03-13)が眠る。



倉渕町の東善寺の秋明菊。小栗の墓地まではかなりの急坂を上る。

[目次に戻る](#)